

# 自己愛人格傾向と両親の養育態度との関連<sup>(1) (2)</sup>

小西 瑞穂

## SUMMARY

Nurturance of adolescents by parents from childhood to now and narcissism were investigated. The participants were 237 college students consisting 95 males and 142 females. We asked them to Narcissistic Personality Inventory-35 (NPI-35; Konishi, Okawa, & Hashimoto, 2006), Nurturance Scale (for each of parents). The results suggested that NPI-35 scores of males were higher than females. And, warm-hearted and indulgently nurturance by the father correlated narcissism in adolescence of females.

### 目 的

健常者に見られる人格特性である自己愛人格傾向の特徴には、エネルギーで外向的、自信が強く、自己本位、競争的・攻撃的で、共感性が乏しい(宮下, 1991)という側面がある一方、不安定な自己像を有している(小塩, 2001)という側面が報告されている。

自己愛人格傾向に限らず、人格特性の形成において両親の養育態度が大きく影響することを指摘する研究は多い。これまでに自己愛を形成する両親の養育態度には2つの主流な説がある。1つは冷淡で共感性のない母親に育てられたことを指摘したKernberg(1975)の説、もう1つは子どもに対する両親の過大評価によって自己愛が形成されるというMillon(1981)の説である。その中でMillon(1981)は、両親の注意を一身に受け、特別な存在として扱われ、愛されるべき完璧な人間であると両親に見なされている子どもは、自己に対して幻想を抱く傾向にあると指摘している。

我が国では、宮下(1991)が自己愛人格傾向と両親の養育態度との関連について検討し、男性では父親の支配的で介入的な態度が、女性では母親の感情的で情緒不安定な態度が自己愛人格傾向の高さと関連していることを報告している。このように、これまでに自己愛人格傾向と関連する両親の養育態度には理論的および実証的にも様々な説が存在しており、両親の愛情深い態度が子どもの自己愛人格傾向の高さに関連するという説と、両親あるいは母親の否定的な影響を持つと推測される養育態度と子どもの自己愛人格傾向の高さが関連している説とが存在している。つまり、子どもの自己愛人格傾向について、両親の養育態度のあり方および両親あるいは父親、

母親それぞれの養育態度がどのように関連するのかわく見解は一致していない。そこで、本研究では現代青年において自己愛人格傾向と両親の養育態度がどのように関連しているのかを父親および母親それぞれの養育態度と子どもの性差を加味し、検討を行う。

なお、戸田(1990)は、親の養育態度が子どもの人格特性に影響する場合には親の実際の態度(客観的環境)と認知された親の態度(主観的環境)が存在することを指摘し、児童期以降において後者の態度の影響が強くなると述べている。そこで、本研究では宮下(1991)と同様に、青年自身が現在認知している、幼少期からの自分に対する両親の養育態度に焦点をあて、両親の養育態度と自己愛人格傾向との関連を検討することを本研究の目的とする。

### 方 法

**調査協力者** 大学生237名(男性95名、女性142名)を対象に行った。平均年齢は男性19.60歳( $SD=1.49$ 歳)、女性18.96歳( $SD=0.88$ 歳)であった。

**質問紙** 以下の質問紙を用いた。

1. Narcissistic Personality Inventory-35(以下NPI-35と略記する): 小西・大川・橋本(2006)の自己愛人格傾向尺度を用いた。回答は「非常にあてはまる(6点)」から「全くあてはまらない(1点)」までの6件法で測定した。この尺度は35項目で、「注目欲求」「誇大感」「主導性」「身体賞賛」「自己確信」の5つの下位尺度から構成されており、十分な信頼性と妥当性が確認されている。なお、本研究では総体概念としての自己愛人格傾向を測定したいため、下位尺度レベルに

よる分析は行わない。

2. 父親・母親の養育態度尺度:戸田(1990)による,父親・母親の養育態度の認知を測定する尺度を用い,「あてはまる(5点)」から「あてはまらない(1点)」までの5件法での回答を父親,母親別に求めた。質問項目は各36項目で,父親・母親共に同じ内容で,主語が異なるだけであった。回答の際には子どもの頃から現在に至るまでの両親の行動・態度を想起し,総合的な評価をするように教示した。

**手続き** 実験室で10人以内の少人数による集団法を用いて,質問紙調査を行った。

**倫理的配慮** 調査協力者にはすべて,研究の目的,主旨,方法,得られる結果等に関して,十分な説明を行い,書面にて同意を得た。

## 結果

**各尺度の分析** 1. NPI-35 内的整合性を調べるためにCronbachの $\alpha$ 係数を算出した結果,.94であり,尺度には十分な内的整合性が認められた。

2. 父親・母親の養育態度尺度 戸田(1990)は,短大生を対象に調査を行った結果,「愛情—無関心」「統制—非統制」「服従」といった3因子を父親,母親共に抽出したが,本研究では標本が大学生であること,加えて戸田(1990)が報告している下位尺度のうち,特に母親の「服従」下位尺度の $\alpha$ 係数が.53と低いことから,本尺度については各36項目に対して男女込みで因子分析(主因子法・Varimax回転)を行った。固有値の減衰状況と因子の解釈可能性から父親は3因子,母親は2因子が妥当であると判断した。そこで,因子負荷量の絶対値が.40以上で,2つ以上の因子に負荷していない項目を採用し,因子分析を数回繰り返した結果,父親は4項目が削除され32項目の3因子構造,母親は7項目が削除され29項目の2因子構造を得た。

父親の場合,第1因子は16項目からなり,父親が情

Table1 各尺度及び各下位尺度の男女別平均値とt値

	男性(SD)	女性(SD)	t値(df)
NPI-35	116.89 (26.71)	108.40 (24.73)	2.51 (235)*
<b>父の養育態度</b>			
愛情	53.05 (12.04)	56.02 (12.51)	1.82 (235)
統制	26.13 (8.56)	26.45 (9.55)	0.27 (235)
甘やかし	8.07 (2.69)	9.33 (3.29)	3.22 (225)***a)
<b>母の養育態度</b>			
統制	37.28 (12.59)	38.37 (11.65)	0.68 (235)
愛情	59.03 (8.99)	62.10 (9.19)	2.54 (235)*

\* $p < .05$  \*\* $p < .01$  \*\*\* $p < .001$

a)分散が等質でなかったため,Welchの検定を行った。

緒的に支えてくれ,意見や考えを受け入れ尊重してくれてきたことを示す項目に高い因子負荷が見られ,「愛情」因子と命名した。第2因子は12項目からなり,父親が子どもを意のままに支配しようとしたり,口うるさく指示してきた態度を示す項目に高い因子負荷が見られ,「統制」因子と命名した。第3因子は4項目からなり,父親が子どもの言いなりになってきた態度を示す項目に高い因子負荷が見られ,「甘やかし」因子と命名した。母親の場合には,第1因子は父親の第2因子とほぼ同義であり,「統制」因子,第2因子も同じく,父親の第1因子とほぼ同義であるため「愛情」因子と命名した。

戸田(1990)は父親,母親共に,同じ因子構造を報告しているが,本研究では異なる結果となった。しかし,各下位尺度の $\alpha$ 係数が父親の「愛情」は.93,「統制」は.88,「甘やかし」は.64であり,母親の「統制」は.91,「愛情」は.90であったことから,比較的良好な内的整合性が認められた。

### 各尺度の基本統計量および各尺度の性差について

項目の素点を合計し,各尺度及び各下位尺度の合計得点について,男女別の平均値の差を検討するためにt検定を行った(Table1)。NPI-35 ( $t(235)=2.51, p < .05$ )において男性の方が女性よりも有意に高かった。また,父親の養育態度尺度における「甘やかし」( $t(235)=3.10, p < .01$ ),母親の養育態度尺度における「愛情」( $t(235)=2.54, p < .05$ )の各得点において女性の方が男性よりも有意に高かった。

**各尺度間の相関関係** 自己愛人格傾向と両親の養育態度との関連を検討するために相関係数を算出し,男女別

Table2 男性の各尺度間の相関関係 (N=95)

	NPI-35	父の養育態度			母の養育態度
		愛情	統制	甘やかし	統制
<b>父の養育態度</b>					
愛情	-.048				
統制	.162	-.207*			
甘やかし	.111	-.132	.142		
<b>母の養育態度</b>					
統制	-.187	-.169	.263*	.183	
愛情	.183	.242*	-.193	-.137	-.405***

\* $p < .05$  \*\* $p < .01$  \*\*\* $p < .001$

Table3 女性の各尺度間の相関関係 (N=142)

	NPI-35	父の養育態度			母の養育態度
		愛情	統制	甘やかし	統制
<b>父の養育態度</b>					
愛情	.314***				
統制	.035	-.307***			
甘やかし	.191*	-.062	-.317***		
<b>母の養育態度</b>					
統制	.123	-.196*	.378***	.132	
愛情	.164	.467***	-.212*	-.021	-.318***

\* $p < .05$  \*\* $p < .01$  \*\*\* $p < .001$

にTable2, Table3に示した。NPI-35と養育態度の間には、女性の場合に父親の「愛情」「甘やかし」と正の有意な相関が見られたが、その他の養育態度との間には有意な相関はなかった。また、男性の場合にはNPI-35と養育態度との間に有意な相関は認められなかった。

## 考 察

t検定の結果、男性の方が女性よりも自己愛人格傾向の得点が有意に高いことが示された。この結果は、先行研究における報告(e.g.小塩, 1998)とも一致しており、自己愛人格傾向の程度には性差が認められることが明らかとなった。男性のNPI-35得点が女性より高かったことは、自己愛人格傾向の高さが男性性役割観に関連するという報告(小塩, 1998)から考察できるだろう。つまり、NPI-35には「誇大感」や「主導性」「自己確信」という下位尺度が内包されており、このような自分の権力や能力を実際よりも強く示そうとする特徴が指導力や頼りがい、自己主張性の高さなどを示す男性の性役割観と関連していると考えられる。

次に、自己愛人格傾向と両親の養育態度との関連については、女性のみ父親の愛情豊かで甘やかしがちな養育態度が青年期の女性の自己愛人格傾向の高さと関連していることが明らかとなった。この関連は宮下(1991)が報告した母親の感情的で情緒不安定という養育態度との関連とは異なり、両親の注意を一身に受け、特別な存在として扱われることが自己愛人格傾向を形成するというMillon(1981)の説を一部支持している可能性もある。子どもにとって、親に愛されていると認知することは、親にとって自分が必要な存在であるという重要な感覚を獲得することである。自己愛人格傾向についてはそれが過度に増大し、自分自身に対する過大評価や過度な自信が生じ、自分は特別な人間であるというような誇大感や特権意識を生み出すのではないかと考えられる。また、この関連が男性には認められず女性にのみ認められたことについては、以下のような考察が考えられる。松元(1997)は、青年期は親からの分離個体化の時期、つまり一定時間以上親から離れていられることが可能になる時期で、パーソナリティへの影響は親以外の要因によるところが大きくなると指摘していることから、青年男性の自己愛人格傾向には養育態度だけでなく、友人関係な

どの他の関連を探っていく必要もあるかもしれない。

次に、女性の場合、これまで自己愛人格傾向との関連が示されてきた母親の養育態度ではなく、父親の愛情深い甘やかしがちな養育態度との関連が認められた。この点については、先に自己愛人格傾向と男性の性役割観との関連を指摘したが、女性の場合、男性である父親への同一視が自己愛人格傾向を高める可能性を示唆しているのかもしれない。つまり、父親の愛情深く甘やかしがちな態度により、父親への肯定的な印象が促進され、理想化がなされ、その父親の男性的な役割や考え方、態度を取り込むことによって女性は自分自身に対する自信や確信度を増し、男性の性役割観と関連する自己愛人格傾向を強めるのかもしれない。しかし、本研究は横断的データであり、その因果関係を説明することはできないため、縦断的調査を取り入れ、注意深く検討していく必要がある。

## 引用文献

- Kernberg, O. (1975) *Borderline conditions and pathological narcissism*. New York: Jason Aronson.
- 小西瑞穂・大川匡子・橋本 宰 (2006) 自己愛人格傾向尺度(NPI-35)の作成に関する一研究 パーソナリティ研究, 14, 214-226.
- 松元泰儀 (1997) 親子関係加藤隆勝・高木秀明(編)青年心理学概論人間関係の変化誠信書房pp.98-109
- Millon, T.(1981) *Disorders of personality : DSM-III, Axis II*. New York: Wiley.
- 宮下一博 (1991) 青年におけるナルシズム(自己愛)的傾向と親の養育態度・家族の雰囲気との関係 教育心理学研究, 39, 455-460.
- 小塩真司 (1998) 自己愛傾向に関する一研究 - 性役割観との関連 - 名古屋大学教育学部紀要(心理学), 45, 45-53.
- 小塩真司 (2001) 自己愛傾向が自己像の不安定性、自尊感情のレベルおよび変動性に及ぼす影響 性格心理学研究, 10, 35-44.
- 戸田弘二 (1990) 女子青年における親の養育態度の認知とInternal Working Modelsとの関連 北海道教育大学紀要, 41, 91-99.

注1) 本研究は日本性格心理学会第12回大会(2003)で発表したデータを再分析、再構成したものである。

注2) 本研究は平成21年度科学研究費(若手研究(B)課題番号19730429)「自己愛人格傾向のストレス対処過程における基礎的・臨床的検討 - 介入に向けて-」の研究補助を受けた。